

バックアウト・ムービーズ

私をKOで打ちのめした映画

Round 6

シチリア島と『ニューシネマパラダイス』

「トト、二度とここに帰って来ちゃいけないぞ。わかったか! さあ行け!」

幼い頃、父親が戦死したトトにとって、ずっと父親代わりだった、優しくトトを助けたアルフレードおじさんが顔を鬼にして言うセリフは、強烈。生まれ育ったシチリアの村をあとにして、列車で旅立つ青年トトは、その迫力に言葉も返せない。見送る村人は「早く帰っておいで」。アルフレードは、火事で視力を失っている。ここに素晴らしい対比がある。見えない人は真実を見抜き、見えてる人達には、真理がまったくわかってない。未知に向かって旅立つ者は成長し、惰性の世界に留まるものには衰退が襲いかかる。

「Now, I understand... シチリアに来て、あのセリフの意味が初めて理解できたわ」私と島をあちこちドライブした女性は「わかっているつもりが一番わかっていない。その土地に行かない限り何もわからないわ」と、なんだか冷水で顔を洗ったかのような爽やかな表情を見せた。彼女はあの傑作『ニューシネマパラダイス』(1989、ジョゼッペ・トルナトーレ監督作品)を3回ほどは観ていて、作品を理解していたつもりになっていただけに開眼・解脱にも似た体験をしていた。ことわざ「百聞は一見にしかず」は正しい。

「帰ってくるな!」と言われたトトは30年以上帰らなかつた。映画の終盤、故郷に戻ると、いつの間にか「旅立ち成長した」自分と「何も変わらずに、ただ時間が過ぎた」人達の対比が映し出される。



ジャック・ベラン (左) と筆者



エンニオ・モリコーネ (中央) とアンドレア (左) と筆者

いい本や映画には、多くの人が感動するが、作品中の言葉、虫の声、色、沈黙に込められた奥深い意味は、作者の意図の3%もわかっていない。世界をひとりで10年くらい旅した後に同じ作品を見るとわかる。10年前は何もわかってなかったことが、町では、留まっているだけの人達が、わかったつもりで人に講義したり権力行使したりしている。世界の町々の多数派とは、そういう人達で構成されているという矛盾や貧困、歴史、家族、階級社会等を描いているのだが、映画評論家達は、こぞって「映画への愛を描く作品」と讃えるからおめでたい。

「いくらトルナトーレ監督がシチリア出身といえ、あれほどの映画を29才にして撮ったのが驚き」と言う私に「まさしく、それがすごいんだ」と応えたのは、大人になったトトを演じた名優ジャック・ベラン。200本近い作品に出演、監督、製作した大御所がポケットからタバコを出した

瞬間に「わるいけどタバコだけは勘弁して」という若造の私を見て即座にポケットを戻したところがいい。だから『WATARIDORI』(2001)や『オーシャンズ』(2009)などの反環境破壊・反動物殺戮の力作を撮ったのが理解できる。彼は27才でギリシャの軍部独裁政治に真正面からケンカを売った『Z』(1969)を製作しカンヌ審査員賞、アカデミー外国語映画賞を獲得した筋金入り。ハンサムなヘナヘナ役者はゴロゴロいるが、命がけでファシストに挑み、世界中の動物を守る役者は滅多にいない。村人役で共演したイタリアの個性派俳優レオ・ゴロッタもとても気さくな人だった。

歴史に残る旋律で全編を包み込んだエンニオ・モリコーネは、シチリアの日差しの中、身体中が繊細な感覚と鋭利な神経で研ぎ澄まされていた。共作した息子のアンドレアは対比的に朗らか。東京フォーラムでコンサートをした時は、3日間、インターバルの度に奥さんのマリアが私ごときに「どうだった? どう思う?」と優しい笑顔とはいえ、とても真剣に感想を求めるところに夫への愛情、プロの完璧主義が見える。「曲を書くと、まずマリアに聴いてもらうんだ」とエンニオ。

傑作とは、最新のカメラやハイテク技術が作るんじゃない。最高の人間たちが結集して作られる。フランス、イタリア、スペイン、ドイツ周辺の「国境なき芸人団」は、目まぐるしく世界を歩き来して高い芸術作品を生み出す。

「帰って来るな。さあ行け!」は、彼ら自身の声。



▲ トトに「帰って来ちゃいかん!」とアルフレード

(Lucky Day)